


筆道資料の探訪

筆の歴史

今からおおよそ四千年前「仰韶^{ヤウシャウ}期^{*}

の彩陶土器の中に毛筆で描いたと思われる文様があります。現存している漢字で最ものも

のは段墟出土の獸骨や亀甲に刀刻された文字です。この中で筆字にあたる「」という形で木軸か竹軸の先に獸毛を束ねて取りつけたものを手に持っている甲骨文（象形文字）があり、この時代には確実に筆があつたことが証明出来ます。中国では一般に毛筆は蒙恬^{もうてん}が發明したものだといわれていて、彼を筆祖とする信仰があります。

「史記」に「始皇恬と太子扶蘇とをして長城を築かしむ恬中山の兔毛を取りて筆を造り案を判せしむ」とあります。

秦の蒙恬將軍が兔毛筆を造つて献上したその功によつて、蒙恬は管城という所に封ぜられたので筆の別名を管城と言います。筆の古文は聿^いですが「楚は之を聿と言ひ呉は之を不聿と言ひ秦は之を筆と言ふ」とあるところを見ると、竹冠が付いたのが秦時代からということになり筆は蒙恬が發明したのではなく今まであつた聿を改良して秦時

代式の筆を造つたのが彼でしよう。

新中国になつて古代の遺跡が發掘されて新しい資料がいろいろと發見されました。その中に、秦より一時代古い戦国時代の楚の遺跡から木管に獸毛を付けた筆が發見されたのです。現在の筆とは少し異つて弾力のありそうな細い木軸にその一端を裂いて獸毛を束ね、絹糸でくくりつけた形です。毛筆の部分もかなり完全に保存されています。これが現在判明している最古の筆で「長沙筆」と呼ばれているものです。

幕末から明治にかけて当時日本一の筆の名工と言われた高木寿穎が円山応挙の描いた蒙恬將軍の画像を手に入れ、楊守敬に撰文揮毫を乞ひ向島の三囲神社境内に碑を建てました。蒙恬將軍のこの碑は今日も健在で毎年

三月十六日には東都の筆匠たちはこの碑の前で筆祭りを行つています。